

〈令和 2 年 7 月豪雨災害〉

『日赤長崎県支部救護班』を延べ 12 日間 熊本県へ派遣いたしました！！

救護班 3 個班（医師 3 名、看護師 9 名、薬剤師 3 名、調整員 5 名の計 20 名）を 7 月 11 日、17 日、23 日からそれぞれ 4 日間ずつ、特に被害が大きかった熊本県人吉市・同県球磨郡へ派遣しました。

近年、毎年のように豪雨災害が発生しておりますが今年も例に漏れず、熊本県をはじめ多くの県が豪雨に見舞われました。

長崎県支部救護班が現地入りした 7 月 11 日には一部の医療機関で診療が行われていたため、医療ニーズはそれほどありませんでした。しかし、避難所での生活に対するストレス、家財を失ったり帰る場所をなくした喪失感や将来への不安等、心理的な訴えが多くありました。

また、今回はコロナ禍での大規模災害であり、運営スタッフや私たち日赤を含む支援者は感染症対策にも対応を迫られつつ避難所の運営・支援を行ないました。



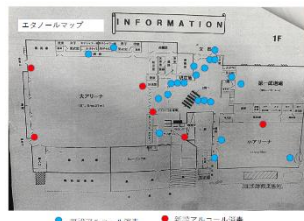
発災直後「球磨村」の様子



「段ボールベッドの組み立て」



「保健師との情報共有」



「作成した消毒液マップ」



「ボックス型に仕切られた居住区域」

長崎県支部救護班が現地入りした時には、被災地は急性期から過渡期へ移行しつつあり、医療ニーズはほぼ落ち着いていましたが、そのような状況でも避難所での生活には様々な訴えがありました。加えて新型コロナ感染症にも注意が必要になるなど、医療だけではない様々な支援が必要とされていました。また、そこで生活する避難者、それに対応する運営スタッフの双方が疲弊している様子もうかがえました。

長崎県支部救護班は様々な支援者と連携しながら、診療活動のみならず避難所の保健衛生指導や不足している物資の依頼、他機関との情報の橋渡し等総合的な支援活動をして参りました。



「救護班第 1 班と諫早病院スタッフ」



「救護班第 2 班@人吉保健所」



「救護班第 3 班@人吉保健所」